

INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES

GRADUATE SCHOOL OF THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学大学院情報学環 学際情報学府

学環学府

number. **Eight**

駒場キャンパスの“情報学環”

INTERVIEW

目で見て楽しめるものを…。 山口泰教授インタビュー



「情報学環での文系、理系というのは、特に異質な感じはしていません。免疫があるというか、教養学部もそうですから…」駒場第1キャンパスのようす、研究について山口教授に聞いた。

研究について

私の研究は、言葉にするのは難しいんですが、かなり無理矢理まとめるならば最終的に絵で楽しめるものを、技術的な観点で扱おうという感じです。もともと私は工学部出身で、一時期、私立大の機械工学科に勤め、現在の駒場に移ってきました。私大で働いていたころは、3次元の形を計算機の中でどう扱うか、形状の位相モデルや曲線や曲面の処理などを研究していました。それが、他の人と仕事をするとつれずつ、扱うことがシフトしてきました。計算機シミュレーションによるボリュームデータの可視化や、ビューモーフィング（view morphing）といって2枚の異なる角度から撮影した写真をもとに、途中の角度の画像を生成することなどはじめました。最初は比較的固めの数学寄りの話だったのですが、だんだん変わってきたんですね。



オリジナル写真



画風画像生成法で画像処理された“絵画”

一番大きく変わったのは、駒場に来てからです。ここは教養学部で、学環の石田英敬先生もいらっしゃいますよね、石田先生と私はやっていることが全然違うじゃないですか、学生さんも教養の3、4年生や、総合文化の大学院生は、スペクトルが広いんですね。もう少し柔らかい話をやりたい、技術には興味があるけど、コツコツと物を作るというよりは、何かパツと楽しいことがやりたいという人が多いのかもしれない。そもそも物を作りたい、数学をやりたい人はあまり来なくて、そういう人は工学部や理学部に行くわけですから…。そういう学生にひきずられて、今は、学生がこういうのをやりたいと言ってくるのを、じゃあ、やってみようか、というようなとりとめのない状態です（笑）。

扱うことが、変わったことをどう思いますか？

面白いですね。以前は、自分自身の学生の頃の発展でしたが、最近の傾向はどれも自分にとって目新しいことですから…。ある程度、発展する先が見えているというのも、問題を少しずつ解決していく嬉しさがあるけど、面白いことを思いついてやるのも、楽しいじゃないですか。画像などは、目で見てハッとわかるから、そういうのがいいなと思っています。

最近やっていることは、視覚複号型暗号といって、2枚の写真シートを重ねあわせると違った写真がでてくるものや、絵画風画像生成法といって、写真で撮った画像を鉛筆や油絵具で描いた絵のように変換する画像処理もやりました。これでは、ゴッホ風というものも挑戦しましたが、ゴッホの絵というのは、絵画全体のうねりのようなものがゴッホらしさになっているので、残念ながら今の私たちの方法には合わないんですね。上手くはなかった（笑）。スーラの点描画のほうがやりやすいかもしれないですね。彼は、ある意味、計算機でやるようなことをやっている画家なんですよ。絵の具を混ぜないで、絵の具そのものの色しか使わない。ディスプレイはそうですよね、ディスプレイの1個1個を見ると、RGB3色の絵の具だけで絵を描いているようなものです。スーラの場合10色程度は使っているんですが、その10色の絵の具をほとんど混ぜずに点で描いたんです。

絵画に興味がありますか？

ある程度は、聞きかじりで勉強しますけど…。ただ、仕事柄、芸術系の先生と話をすると、「計算機に真似させて何が面白いの？」という反応がとて多くて…（笑）。「自分で描くからいいんじゃないの？」って言われます。あくまでも、絵を描くための道具として、計算機を使って絵を作り出す人たちと、計算機で自動的に何かをしてみたい、計算機で解析してみたい人たちとは、物の見方が違うという印象ですね。

駒場と学環の関係をどう思いますか？

「物理的に遠い」というのが最初にありますね。最近、石田先生が中心になってはじめてましたが、本郷の人たちに駒場に来て欲しいと思っています。例えば、21世紀COEのプロジェクトが駒場に来て、こちらで仕事をするとか…。昨秋は、山内祐平先生ところの学生さんが、研究のために来ていましたが、こういう交流があるといいですね。ネットワークを使って繋がるのもいいんですが、やはり、人間が直接会ったほうがいいと思うんですね。もう少し、駒場と本郷とが密な交流ができるようになればと思います。面白そうなことはいろいろあるので、私も、何かあれば参加したいと思っています。

TOPICS



東京大学情報学環・ソウル大学言論情報研究所合同シンポジウム 「デジタル時代のメディア・文化・政治」及び学生交流ゼミ発表会に同行して

冬ソナファンらしき観光客に混じりソウル金浦空港に到着。ソウル大学との合同シンポジウム(2004年11月4日~5日)出席の花田達朗学環長同行しての韓国出張である。滞在中の宿は、サムソン財閥の寄付によって建てられたというソウル大ホアン教授会館(コンベンションセンター等を備えた複合施設)内のゲストハウスが用意されていたのだが、着くなりその立派な施設に驚かされ、早々にソウル大学のイメージが一新された。

シンポジウム当日の朝8時、朴承寛言論情報研究所長との朝食会が入る。朝の会食に東大一行は驚くが、シンポジウムの打合せから日韓の教育現場の現状まで話題は及び、韓国らしい熱い朝食会となった。

さて、本題のシンポジウム。両校の研究交流は、旧社情研がソウル大言論情報研究所と約10年に亘り行ってきたものだが、それが

情報学環に引き継がれ、今回新たに学生交流ゼミをプログラムに加えた。シンポジウムでは、ソウル大側から教員6名、東大側からは花田学環長、林香里助教授、金相美氏(D3橋元研)が各々発表し、全体を通して活発な議論が交わされた。

翌日の学生交流ゼミでは、ソウル大側12名、東大側から自費参加の8名の院生が発表を行った。特にソウル大側からは熱心に質問や意見が出され、皆、大いに刺激を受けた様子であった。初の試みの学生ゼミであったが、参加者からは高い評価を得、両校にとって意義あるものとして認識された。今回、学生コーディネーターを務めた坂崎基彦氏(M2花田研)は、自身の発表、シンポジウム、ゼミの通訳と大活躍であった。美しい紅葉を楽しむ余裕もない日程であったが、内容の濃い研究交流となった。一方、私は先方の計らいにより施設見学や先方事務との交流を果たし、ここでも有意義な時間を持つことができた。

今回の交流の中で、ソウル大言論情報学科と学環・学府との間で覚書を締結し、その下で円滑かつ継続的な交流を進めていく計画が持ち上がった。早ければ今年度中にも締結の運びとなりそうである。今回の出張を活かし、事務職員として今後の両大学の研究・教育交流の一役を担うことができればという思いを胸に帰路に着いた。

(情報学環事務部学務係 手塚安澄)



言語情報学科の事務職員 Park Soonim氏と



合同シンポ・ゼミ無事終了。参加者全員で記念撮影。

21世紀COEシンポジウム安田講堂にて開催

「次世代コピキタス情報社会基盤の形成」が平成16年度21世紀COEに採択され、平成16年10月27日、11月16日に、東京大学大講堂にてシンポジウムが開催された。

第一回設立記念シンポジウムでは、花田達朗情報学環長の挨拶の後、COE拠点リーダーの坂村健教授が基調講演を行い、このプロジェクトを進めるには産官学民が連携する必要があること、また、今後大学は、知の流通公開機関になっていくべきなど大学のあり方についても語った。次のパネルセッションにおいては、このCOEの中の3つのプロジェクトである「コピキタス情報コンテンツ形成」

「コピキタス情報技術研究」、「コピキタス情報社会国際研究」に関わる教員がそれぞれの研究について述べた。

第二回目は、「コピキタス場所情報システム・シンポジウム」と題して、情報学環と国土交通省が主催となり行われた。既に神戸にてプレ実証実験されている「自立移動支援プロジェクト」を例として説明。このプロジェクトは多くの方に役立つユニバーサル・デザインを考え、世界中で利用できるシステムを目指していること、それに向けて構築すべきことなどについて論じた。



第1回 シンポジウム パネルセッションにて

PROJECT

「TV分析の〈知恵の樹〉」プロジェクト ハイパーメディア型 エンサイクロペディアの制作

東京大学大学院情報学環教授 石田 英敬



生育しつづける知恵の樹木

メディア・コンテンツの〈意味〉を分析する人文科学的な研究と、ITをベースにした技術的知とは、どこで出会い、どのような協働関係を作ることができるのか。そのような観点から取り組んでいるのがハイパーメディア型理論ツール「テレビ分析の〈知恵の樹〉」の制作プロジェクトである。

「TV分析の〈知恵の樹〉」とは、テレビのコンテンツ分析の知をITベースで構造化し、具体的なテレビ番組の分析を蓄積し、理論概念の体系化を促進するために構想された、成長しつづけるハイパーメディア型のデジタル・エンサイクロペディアである。

デジタル機器にストックされる番組データベースを「土壌」に、番組の具体的分析を認識の「根」として、テレビのコンテンツ分析の「知の樹木」を「生育」させるといふ、「知恵の樹 (arbor scientiae)」を根本メタファーとして構想されている。その認識論的なベースは、記号論の新たな展開としての「テレビ記号論」である。コンテンツ分析の知を可視化し、共有し、共に育てる、情報処理および意味解釈の協働システムとして、コンピュータ上での実装をめざしている。

現在試作中のシステムは、「理論マトリクスTHEORY」、「実践マトリクス PRAXIS」の2つのパートからなり、さらにアーカイブ機能として、「番組データベース」、「理論データベース」、「個別研究データベース」を格納する仕組みになっている。

「理論マトリクスTHEORY」は、「記号学の原理」をメイン・ゲートとして、さらにサブセクションに枝分かれしてハイパー・リンクで結ばれている。

「実践マトリクスPRAXIS」は、「番組ジャンル」を基本的なセクションとして構造化されている。

「理論マトリクス」のツリー構造を下位にまで降りていくと、百科事典の「項目」に対応する「lexia」と呼ばれる「読みの単位」に辿りつくように設計されている。そこを知識ベースの構成単位として、他のすべてのlexiaとのハイパーリンクが形成されるように設計されている。lexiaとは「葉」であり、下位セクションは「枝」に、より上位のセクションや部門は「幹」に対応すると考えられている。

●「知恵の樹」の構造図

- 理論アーカイブ
- 動画アーカイブ
- 個別研究著作



「実践マトリクス PRAXIS」もまたツリー構造をもち、lexiaは、最終的には、番組データとリンクすることで、素材と認識とのハイパーリンクを形づくる。実践の「根」として張り巡らされたlexia群は、映像・音声データを「土壌」に、分析の「根」をおろすと同時に、ハイパーリンクを通して理論の「葉」と結ばれている。

新しい「百科全書」の時代

「TV分析の〈知恵の樹〉」システムの理論的および技術的射程はひろく、その応用可能性は、従来型のデジタル理論百科事典にとどまらない。電子メディア・フォーマット上で、マルチメディア素材と理論との出会いを組織し、視聴覚データに概念タグを付すことによって、「書物」ベースではなく、「電子メディア」を知の基本的環境として活用することがめざされている。その意味で、「知恵の樹」システムは、デイドロ・ダランベールの「百科全書」の時代（「書物の知」による「啓蒙」の時代）の次を意識した、新しい「ハイパーメディア百科事典」の追求である。

「知恵の樹」の特徴は、創造的な共同研究作業（＝集団的知性）を可能にする拡張可能性にある。「知恵の樹」への参加者は、自由にlexiaを自ら付け加え、リンク定義を与えることによって、知の樹木をカスタマイズすることができる。

「TV分析の〈知恵の樹〉」システムに、映像インデクシング技術などを組み合わせて大規模な番組データ・ベースを与え、共同研究による個別分析研究を大量に蓄積し、大規模な概念ネットワークを構築することが可能になれば、将来的には、「TV番組の内容分析」の自動生成をも射程に入れることが考えられる。また同様の研究モデルは、テレビ以外の他のメディア・コンテンツ分析にも容易に転用可能である。

●概念と映像とのハイパーリンク



NEWS

「戦争とメディアプロジェクト」 (吉見俊哉教授) ワークショップ開催

情報学環「戦争とメディアプロジェクト」では、村上由見子客員教授のコーディネートにより、2004年11月2日に映像作家リナ・ホシノさんをお迎えし、ビデオ作品「Caught in Between」を上映、作家自身と対話するワークショップを実施した。このビデオ作品は、9・11以降、アメリカ在住のイスラム系住民を襲った悲劇に、かつて同様の体験をした日系アメリカ人が連帯感を寄せ、二者が交流していく過程を記録したドキュメンタリー。マスメディアが報道しない日系アメリカ人とイスラム系市民の交流を描きつつ、日系人強制収容所の記憶や今日のアメリカにおけるマイノリティに対する迫害、市民的連帯の可能性、そのなかでの映像作家のポジションなどについての問題提起がなされている。ワークショップには約50人余りが参加し、映像と政治、日系人強制収容所の記憶を圧殺しようとする近年のアメリカのネオ・ナショナリズム、小さな映像制作に対する市民的サポートなどについて活発な議論がなされた。

「笑と大学」シンポジウム

2004年10月21日駒場キャンパス900番教室にて、映画「笑の大学」に関する情報学環主催のシンポジウムが開催された。映画上映後のディスカッションでは、石田英敬教授の進行のもと、この映画の脚本を書いた三谷幸喜氏、監督の星譲氏が登壇。両氏は、参加者の「笑い」に関する質問に冗談を交えて答えていた。人気脚本家の登場とあって、会場は満席、黄色い声に花束持参の学生もいたほどだった。



教育部研究生募集

社会情報、マス・コミュニケーション、ジャーナリズム、学際情報の分野に関心のある人が対象。

<募集定員>50名
<出願期間>2005年1月31日~2月4日
<選抜方法>一次筆記 2005年2月16日
二次面接 2005年3月1日

詳細は、
<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>
をご参照ください。

教育部研究生寄宿報告

教育部研究生寄宿は、学環教育部の研究生が、毎年1回、自主的に企画・実施する、自主学習(4単位)の成果の発表を行うためのもの。2004年は、10月9日(土)~11日(月)の3日間、前年と同じく、河口湖の旅館松屋にて行われ、約40名の教育部研究生が参加し、6班(アート班、広告班、活字班、ビジネス班、ラジオ班、報道班)に分かれて、それぞれ自主学習の成果を発表した。各班の発表は、参加した3名の教員(須藤修教授、岡崎毅助教授、玄武岩助手)にとっても、内容的に興味深く、意義深いものだったが、それだけでなく、それぞれ独自の工夫により、聴衆を発表に巻き込む参加型の発表となっており、感心させない内容だった。



コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムはじまる

2004年10月13日より、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムが開始された。このプログラムは、近年注目を浴びているコンテンツ分野(アニメ、ゲーム、映画等)において、国際的視野を持って戦略を立てることが出来るプロデューサーおよび技術開発者の育成を目標とした大学院レベルの副教育プログラムである。履修生の中には、大学の大学院生以外にも、意欲のある学部生や既にコンテンツ分野で活躍している社会人が含まれている。カリキュラム内容として特記すべき点は、基盤技術に関する基礎的な講義以外に、コンテンツ分野の日本の最前線で活躍する実務者(映画監督、プロデューサー等)によって行われる実践的な講義やインターンシップが含まれていること。次年度(平成17年度)の選抜試験は2005年3月に実施する予定。

姜尚中教授帰国報告 「ライプツヒ大学での半年間」

2004年4月から9月一杯まで、わたしはライプツヒ大学のライプニッツ特別教授職に就き、高等研究所と日本研究所で教鞭を執ることになった。高等研究所では、主に敗戦直後の日本を、米国の占

領統治や極東政策、さらに朝鮮半島の分断の歴史的経緯などを交えて紹介し、一国単位で縦割りになりがちなアジア地域研究に新たな視点を提示しようと試みた。そこには戦後の日本を戦後ドイツと比較してもらいたいという意図があったことは言うまでもない。熱心な学生達との論議は、わたしにとっても刺激的であった。また印象に残っているのは、ライプニッツ特別教授就任のための記念講演である。風格のある壮麗な大図書館のホールで二百人余りの聴衆を相手にスピーチをすることにいささか緊張したが、反響は上々だったように思う。大学のガゼットに人物紹介とともにスピーチの内容も掲載され、それなりの成果があったようだ。貴重な半年間だった。(姜尚中)

第15回 学環講話会報告

2004年11月24日に開催した学環講話会第15回目は、オーボエ奏者の宮本文昭氏をお招きした。テーマは、「形のないものを人に伝える仕事」。佐倉統助教授が進行役をつとめ、宮本氏がオーボエを勉強するに至った経緯、ドイツ留学をしていたときの生活ぶり、そこで学び、考えたこと、今後のことについてなどについてお話をうかがった。最後にはオーボエの演奏もあり、参加者は、間近に響く澄んだ音色にうっとりしていた。



学際情報学制作展 【iii exhibition 2】

学際理数情報学研究法IIIの履修生を中心に企画された制作展【iii exhibition 2】が、2004年12月10日~12日の3日間、東京大学工学部2号館展示室などで開催された。2回目となる今回は、メディア・アートを中心に、映像作品やインスタレーション等14作品が展示され、学生教職員はもとより、一般の方にも広くご来場いただいた。展示は会場内だけでなく、農学部構内にあるインテリジェントモデリングラボラトリー、工学部8号館ピロティや今秋より開設された「コミュニケーションセンター」内でも行われ、東京大学を文字通り横断した展示になった。



メルプロジェクトからのお知らせ

■公開研究会

1月22日(土)

テーマ:

「市民メディアとデジタル・テクノロジー」

登壇者:

アスケ・ダム氏/ノルウェイで活動するメディア・アーティスト、メディア・プロデューサー

3月19日(土)

テーマ:

「メルプロジェクトの来し方行く末」

両日とも/

場所:学環暫定アネックス2F会議室

時間:午後3時~6時

■民放連セミナー/メルプロジェクト・シンポジウム

2月18日(金)

対話ワークショップセミナー:第二期民放連プロジェクト成果報告会

2月19日(土)~20日(日)

メルプロジェクト・シンポジウム2005

場所:東京国際フォーラム

※詳しくは<http://mell.jp/>を参照。

問い合わせ先:水越伸助教授

shin@iii.u-tokyo.ac.jp

人事異動

<採用>

12/1 金 相美 助手

<21世紀COE特任教員>

11/1 添野 勉 特任助手

11/1 山本拓司 特任助手

12/1 関谷直也 特任助手

<教育部教員>

10/1 猪股 征 非常勤講師

10/1 堀江 洪 非常勤講師

10/1 長尾龍人 非常勤講師

10/1 青木貞茂 非常勤講師

10/1 萩野正昭 非常勤講師

<寄付講座教員(非常勤)>

11/1 中原 淳 客員教員(助手)

<配置換>

9/30 平石 界 助手

<辞職>

9/30 坂田邦子 助手

BOOKS



「工学基礎 ラプラス変換とz変換」 原島博・堀洋一 共著/数理工学社

30年近く前の若き助教時代に作成した講義プリントをベースとし、学環長時代に楽しみながら大幅に加筆して、このほどようやく刊行の運びになった数学の教科書。(原島)



「デジタル・ツナガリ」

原田泉、土屋大洋、C&C 振興財団編著/NTT出版

第5章『『情報化後発国』を支えるインターネット・コミュニティ』野口智子(D2田中明彦研) 著

ネットにまつわるコミュニティに焦点をあてた編著で、情報倫理・インテリジェンス・デジタルデバイスなどのさまざまな論点を取り上げています。第5章で開発途上国についての論考を書かせていただきました。(野口)

編集/発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 企画室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>